（別紙２）

審査結果の要旨

氏名　伊東俊彦

本論文は、ベルクソンの『道徳と宗教の二源泉』における社会論の意味を、社会を「閉じる力」と「開く力」がそれぞれどのようなものであるかに焦点をおいて解明したものである。

第一章は、ベルクソンの社会論の関心が、「個人に働きかける社会的な力とはどのようなものか」を明らかにすることにあることを述べる。そして、この力がそれ自体で「望ましさ」を作るものではないという論点を、社会と道徳との相互規定を言うことで社会成員の社会的行為の事実を肯定的に評価し社会に「望ましいもの」の源泉をみるデュルケームとの対比によって打ちだす。ベルクソンとデュルケームの社会論の位置を測定するために、スペンサー、タルド、エスピナスの社会論についてもみている。

第二章は、宗教的信念が個々人に信じられてしまうのは、安寧をもたらす力としての「仮構機能」によるのだ、というベルクソンの考えを分析し、かつ、仮構機能こそが社会を閉じる力であるとベルクソンが考えていることを示す。デュルケームの宗教社会学、ピエール・ジャネの精神病理学、フレイザーの呪術論の参照が、効果的になされている。

第三章は、個人が社会を「開く」ということがあり得るのか、という問題提起をした上で、社会を開くことの意味を追究し、神秘経験をなす特権的個人とはいかなる存在であるとベルクソンが考えたかを論じ、対象を創造する感情としての「愛」の意義を明らかにする。その際、ベルクソンの思考を浮き彫りにするため対照として、ジュルジュ・ソレルの政治論とウィリアム・ジェイムズの宗教論を引きあいに出している。 この終章はまた、ベルクソンのライトモチーフ、生の躍動や創造という概念の働きへと探索を進めてゆくことで、『二源泉』が彼の諸著作の必然の延長として著わされたのだ、ということを暗に示している。

本論文の優れている点は、上述のように、デュルケームの社会学を中心に多くのさまざまな学説を比較対照項におく仕方でベルクソンの叙述の真意をほぐしてゆく丁寧さにみることができる。ただし、比較を重ねてゆくという同じ方法は、個々の論点ではベルクソンの考えの内実を浮き立たせるのに役立つ反面、読者がベルクソンの論構成の全体を一挙に想い浮かべようとするのには些か整理の努力を要するという、本論文の難点の原因にもなっている。とはいえ本論文は、ベルクソン晩年の社会哲学の独特さの根底にあるものを、ベルクソンが対峙した社会学、社会思想と突き合わせ、時代状況にも対応したものとして納得ゆく仕方で提示したという功績をあげている。よって、本論文は博士（文学）の学位を授与するに値すると判断する。